



東邦大学 医学部 脳神経内科

東邦大学医療センター大森病院

神経学を分かりやすく、深く、そして面白く

狩野 修 教授

東邦大学の脳神経内科は、1960年に日本神経学会が設立された前から存在していた、非常に歴史のある教室です。一方で現在の教室員の平均年齢は30代前半と非常に若く、日々活気に満ちあふれています。当院は東京オリンピック・パラリンピックの開催を控えて開発が進められている羽田地区を含めた人口約70万人の大田区で、唯一の大学病院です。日本全国、また国外から多くの患者さんが来院し、最適な診療を提供しています。治験・研究も積極的に実施しており、その成果をグローバルに情報発信し、疾病で苦しむ患者さんの回復のために努めています。

【教育面での特徴】 当科の教授回診は、研修医のプレゼンテーションの後、患者さんに広いカンファレンス室に来ていただき、大勢の学生や研修医の前で狩野教授が診察します。難しいとされている臨床神経学を、深くそして面白いコメントやアドバイスをもとに研修医や学生に分かりやすく指導しています。自然と神経学への興味が湧くような雰囲気があり、若い先生も自由に発言しています。また近年、東京工業大学と医工連携を活発に展開しており、医療現場からの新たな価値の創造や、SDGs（持続可能な開発目標）への取り組みを積極的に行ってています。

【臨床面の特徴】 パーキンソン病、筋萎縮性側索硬化症（ALS）、多発性硬化症、アルツハイマー型認知症といった変性疾患から脳卒中に代表される急性期疾患まで、幅広く診療しています。入院患者さんの割合は、神経変性疾患と脳卒中が半々で、神経学を学ぶ上で非常にバランスが良いです。また、特徴的な診療としてALSクリニックが挙げられます。呼吸器内科医、リハビリテーション医、胃瘻造設医、専門看護師、呼吸ケア、栄養士、ソーシャルワーカー、治験コーディネーターなどが同じ時間帯に集まり、通院・移動が困難なALS患者さんに対して必要な治療・ケアが一回の受診で済むような診療体制を整えています。これは欧米では標準的な診療形態ですが、わが国では行われていないため、当科のALSクリニックが全ての神経変性疾患の診療モデルになることを目指しています。また、リハビリテーション科と協力し、HAL®を用いたサイボーグ治療で患者さんの歩行改善を目的とした診療を行っています。その他、ALSシンポジウムやALS Café webinarと称して全国規模の患者会も行っており、毎回多くの患者さんやご家族が参加しています。

【専攻医研修プログラム】 最初に当科あるいは基幹施設（済生会横浜市東部病院など）の後期研修医を選択していただきます。当科のレジデントの場合は、4年間のうち関連病院である国家公務員共済組合連合会三宿病院（世田谷区）、国立病院機構東埼玉病院への出向も含まれています。そして卒後4年目に内科専門医、7年目に神経内科専門医取得を目指します。またプログラムの途中で大学院への進学も推奨しています。なお、妊娠・出産後、お子さんが小学校に入学するまでは当直は免除しており、そういう働きやすい環境から教室員の約4割が女性医師です。専攻医のみならず、学生からキャリアのある先生まで、どなたでも大歓迎です。

文責：平山 剛久（医局長）



HOSPITAL DATA

東邦大学 医学部 脳神経内科（東邦大学医療センター大森病院）

〒143-8541 東京都大田区大森西6-11-1

問い合わせ▶yurika.okuma@med.toho-u.ac.jp

HPにはこちらの2次元コードから▶



医局員	27人
指導医	15人
専攻医	7人